

戸隠山顯光寺略縁起

江戸末の刊か。外題は「戸隠山略縁起」とある。原本の右ルビは適宜省略したが、加えることはない。左に訓読みのルビが多々あるも省略。またルビの一部と送り仮名とが重なる場合は、ルビの重なる部分を省略。

長野県立図書館及び長野市立博物館に所蔵。なお、長野県立図書館末部の「戸隠山 顯光寺」の次に「信州水内郡云々」と乱れた文があるが、元所有者の書き込みと思われる。『碧冲洞叢書六八輯』に翻刻がある。「戸隠山略縁起」という同名の書が岩瀬文庫にあるが別物。

とがくしさんけんくわうじりやくゑんぎ
戸隠山顯光寺畧縁起

しなのゝくにみのちのこほり
信濃國水内郡戸隠山顯光寺ハ加葉佛説法の

ほうくつ
寶窟鎮護國家の靈場也其畧初を考ふれば

しんれいちこく
神靈治國の往昔人壽貳万歳の時なり其後

がくもんぎやうじや
学門行者と云人有智行群を抽むで徳驗世

ひい
に秀て伽藍を諸國に建利益を法界に周ふ

つひ
す終に虚空に登り葬する所なしと云々

にんみやう
行者此山を再興せんと欲す仁明天皇の御宇

かじやう
嘉祥三年庚午三月中旬に先飯繩山に登るに

雪深く巖峻しく雲霧雷鳴して上る事

あたはす還而半腹に住して諸の神祇の御為
に經を讀呪を唱ふ命を捨て道を求む誓を

發して曰善神威を加へ我願を助け給へ我若

頂に至らずんハ永く菩提に至らじ如是願を發

訖て其頂に登り四溪を臨むに神靈夥し日曛

西窟に卜居して禮拜懺悔す然而後金剛杵を

投て誓て曰未來佛法を繁昌し群生の福を

豊ならしめむと々随而其杵遙に一百餘町を

經て宝窟に止つて光明を放ッ行者杵の光を

尋て此洞に住して地主を行ひ頭はさんと欲而

深く祈念する所に地の底に聲有て高聲

に唱て曰南無常住界會大慈大悲聖觀自在

四所本躰三所權現放光與樂々此聲終ら

さるに聖觀音の像并釋迦文佛將軍地藏

光明赫奕として紫金の蓮臺に座し忽に

涌出し給ふ々深夜に及で南方より臭風頻

に吹て九頭一尾の大龍光りを放て来り坐て曰

喜ばしき哉行者我前に来れ汝に語らん

當山は破壊既に四拾餘箇度也吾寺務を行へ

る事七箇度也然れば未来際に至り此山を

守護せんと誓ふ汝すべからく菩提心に住して

早く大伽藍を達べし夫峯に五丈の白石有

面は粉壁のごとし両界の曼荼羅を顕はす

故に兩界山と名く焔に寶石の密檀有加葉

佛説法行化の處也都而三拾三所の窟あり

自然湧出の古仏 大慈大悲の化現に合へり昼夜に万民

を擁護し悪業の群類を濟度在せり故に

一度此山に攀れば永く悪趣の苦を離れ定

業又能轉すと云訖て住侶の法式等を定て

本窟に歸去す 々然るに此山を戸隱山と名る

夏は天照大神日月を抱き給ひて天の盤戸

に引籠らせ給ひしより世間長夜の闇と也

耕作紡績諸との作業等其勤を失えり故に

八百萬神達はを歎き高天原にして燎を焼

神樂を奏し給ふ依之太神御心倭らき盤戸

すこ ひきあげ たちからをのみことひきはな かくしおき
を少し引明給ひしを手力雄尊引放ち隠置

よつ 此山嶽中の奇妙
給ふに依て戸隠 不レ可レ勝計略之と云りこれより

しゆんくわん
天地ひらけ初り日月の巡還時をたかえずそれ

なりはひみち つとめにんしゆいま にたへ ざることひとへ
そのの業道との勤人種尔レ今不レ絶事偏に

いとく かいびやく
戸隠権現の威徳也さるに依て天地開闢日月

しゆつせう いじんとも またこんかうしよ あらは
出生の威神共申也亦金剛杵の光りを顕すに

よつ そのゝちせいさうはるか おしうつり
因て顯光寺と號せり其後星霜遙に押移

ゑんのう ばそく しんたい はいゑつ
て役優婆塞此山に至り権現の眞躰を拜謁

しんしん そうじゆ ことあと たち
せんとす森とたる叢樹狐兔跡を断巖窟

なめ
露滑らかにして鳥ならでかけりがたし

う はそくゆうめう はげま てうぜう
されども優婆塞勇猛を励し既に頂上に

さんがん やまなりたにひゞき
至らんとす時に山巖振動し山鳴谷響て

うんむ みち とさ こゝ おうくわん
雲霧路を鎖せり優婆塞此に至りて往還

しか いづ ほんそうあらハ
を苦しめり然る所に何くともなく梵僧頭れ

つげ いはく ゑんのせうかく
告て曰汝は是役小角也我汝を待事久し早く

じゆんげん すみやか
此山を巡見して速に道をひらかざる然るを

こゝ ありさまくしゆれんぎやう
爰にやすらひて苦しめる分墅苦修練行

せうかく いはく しやもんわが
の行者にあらずと小角笑つて曰汝沙門我

名いぶかしを知る事不審じしゆ此山ゆれいじんの地主しよ靈神しよの所

居こは何地いつちぞ彼所かのところへ我ゆふいんを誘行ほんせよ梵僧そうなはち則さうけい

草經さうけいを開みちひききて小角みちひきを引導みちひき早く頂上みちひきに

至われて権現しよを拜せうぐんせよ吾われは是下しよの宮せうぐんの將軍せうぐん

地藏こつぜんなりとて光うせを放こつぜんち忽然うせと失給うせふ

小角ふうん奇異ふうんの思ふうんひをなふうんしそれより頂上ふうんに

登またらむとす時またに亦天地また鳴動ふうんして風雲ふうん

樹きを飛させきし沙石あけつちくれを挙塊ふらを降おどろきす小角おどろき驚おどろきて觀念ちうに住ちうし

目めを開めて是めを見めれは風雲たちまちしづまつ忽はん静ふくて山はんの半腹はんに至はんる

其時みかたち権現あらは善おろちを躡おろちし大蛇おろちの身けんを現けんじ山嶽けん

周圍しつさう大槩とりまきを七逆しつさうに取卷頭とりまきを絶頂もたに持もたせて小角つげたまはくに告日つげたまはく

汝ちうし菩提心ちうしに住ちうして早く此山ちうしを開ちうしべしと小角ちうし是ちうしを見て

寒心かんしん平伏よのつねせり尋常よのつねのもの是ちちまちを見ちちまちハ忽はい血ちちを吐ちちて立所ちち

に命めいを失うしなひなん小角うしな再拜うしなしてもふさく

我誓願よつに依よつて山々よつを開よつく此山かふに至かふて如かふレ斯かふの

靈瑞れいずい信心れいずい感動しせり然しれ共おひたし此夥鋪おひたし大蛇おろちの

身しにては參詣そめいの緇素おとし落おとし命還かゝつて而かゝつて権現かゝつての

利益りやく永欠ながくけなん願ねかは小身せうしんを現げんじ給しへ然しらは

巖窟がんくつに封ふうじ奉ほうらんと言ごん下に忽たちまち小蛇せうじやの身しんを

現すなはちじ小角すなはちが前すなはちに來ふうり給ふふ則すなはち巖窟ふうに封ふうじ

籠こめ小角こめはそれより麓かえりに帰かえり山かえりと峯かえりくを

修行しゆぎやうせり云彼封かのぜし巖窟かは今かの九頭龍くわうとうりゆう

権現いはやの巖すなはち也是則いはや手力雄尊すなはちの分身ふんじん天地開かい

關ひやくの靈神れいじん五穀成就おんかみ福寿增長おんかみの御神也

抑そもそも九頭竜くわうとうりゆう権現くわんげんハ内うちには菩薩ぼさつの行ぎやうを秘ひし

外ほかには靈蛇れいじやの形かたちを現げんじ群蓄ぐんちくを妙果めうくわに至いた

しめ有情うじやうを昼夜おうごいまに擁護しやうご在あいたす然しかる間効あいた

驗けん弥新いよにいにして靈威れいゐ倍盛ばいせい也壽命じゆゑん福祿ふくろくを

欣ねかへば中天ちうてん貧窮びんぐうを轉てんじて長寿ちやうじゆ厚福こうふくを

與あたへあるい或または官くわんを求め子こを求め亦また智ちを祈いのり道みちを

祈いのり賣買ばいばい勝利せうりの類たぐい恭敬きやうきやうを成なせは速すみやかに

是たなつものを授たまく或またハ五穀ごこくの神しんとして農作のうさくの稷しやく万

民たみ豊樂ほうらくの祈願いのねがひを叶もへ若もは病患びやうげん急難きゅうなん呪

咀怨敵おんてきに至いたるまで頼たのみを懸かくれは忽たちまちに遁のがる

レ之これ如斯等かくのごときの種たねとの靈瑞れいずい感應かんとん逐一ふちくいちに不いとまレ違あらず

況いはんや亦また每夜寅まいたらの刻こく御供みくを備たもふるに受う之これ

一粒りゅうも不のこ残さず皆喰さんきつし給たまふて天下萬人あんきの

安危あんきを示したまふ其靈瑞かつゑん揭あ焉たり或は

檀主だんしゆの稱号を記て是が為みくに御供そなふを備る

に鬪諍とうじやう口論しゆそ呪怨ひようけん敵病患急難しかのみならず如火難

水難公私背命等あんきの安危よつに依てそれくに

配膳飯供はんくに其驗しるしを頭あらはせり又觀音

大士だいじせん籤ふつを振て檀主の吉凶を考ふるに施主の安危

一ひととして頭あはれずと云事なし誠まこと吾朝無雙わがの

靈神仰あをいで可しんづ信者べきもの乎をや

戸隠山

頭光寺

(以下、長野市立博物館像本にはなく、所有者名の書

き入れと思われるが乱れて読めず)

信州水内郡

????????????????

????????????????右衛門

註

「自然湧出の古仏
一とに立給ふ略之」の割注のルビは左の通り

じねん ゆしゆつ こぶつ いちいち これをりやくす

自然湧出の古仏 一とに立給ふ略之

「戸隠 此山嶽中の奇妙 と云り」の割注のルビは不鮮明
不レ可レ勝計略之

なるも左の通りと思われる

このやまがくちゆう

此山嶽中の奇妙

あげてかぞふるべからず これをりやくす

不レ可レ勝レ計略之

「山嶽 周圍大槩 を」の割注のルビは左の通り
一百餘里也

しう むたいかい よ
周圍大槩 一百餘里也

なお、

其時権現善みかたちを顕し大蛇の身を現じ山嶽

の「善」は造字して画像で表示、原像は左の通り



「信州デジくら」を外題の「戸隠山略縁起」で検

索すると長野県立図書館蔵の画像がある。